

堤 幸彦

Yukihiko Tsutsumi

山田佳奈

Kana Yamada

SPECIAL INTERVIEW

山田 初めてお会いした時、ものすごい紳士だなと思いました。物腰が柔らかで。忘れられないのが、そのあと飲みに行って、「おれは酒豪なんだ…じゃレモンサワー!!」って言われていて。一気に場が温かい雰囲気になって。

堤 あれ定番なんだよね。「おれ、酒にはうるさいんだよね…じゃ、カルーアミルク」とか。(笑)

山田 おしゃれですよ、私も使おうと思いました。お酒好きなんですけど、飲みすぎると膝が痛くなっちゃって…。

堤 え、だって若いでしょ?32歳?世も世なら娘でもおかしくないですよ。

山田 そんな娘世代なのに良くして頂いて、本当にありがとうございます…。堤さんに「先生」って呼ばれると本当に申し訳ない気持ちになるんです。

堤 いや、先生は先生でしょ。僕も一番最初に88年に映画撮った時に、それまでバラエティーの仕事が中心だったから「監督」って呼ばれることに違和感があった。だけど、それはもう呼称に基づいた契約みたいなもんなんだよね。特に僕がやっているのは「映画産業」の世界で100%自分の作品かと言われたら、そうではない部分はどうしてもある。そういった時に役者さんやスタッフさんに「監督」と呼ばれると監督として応えなければいけないという責任を感じることがあるんだよね。だから今は「堤さん」と現場で呼ばれると辛いこともある。

山田 なるほど。さすが、深いですね。

堤 特に40年も商業の中でやってくと求められている制約の中に、そこにどう自分らしさをトッピングするかといった創り方に良くも悪くも慣れてきてしまっているんだよね。だからこそ、山田さんの作品はナイフのように胸に刺さったわけです。

山田 わー、ありがとうございます。堤さんの作品って私たちの世代では必ず次の日に学校で話題になっていたものばかりだったので、その堤さんが「荒川、神キラーチェーン」(※1)を観に来てくださったのは劇団的に事件でした。

堤 そう。あれもね、チラシをどこかの劇場で見て、すごくロックを感じたの。これは見なければいけないと思った。あのディレクションも自分でやってるんでしょ?

山田 そうですね、チラシはお客さんに一番最初に接触できるので。こだわりは強く持っています。

堤 世界観が徹底されているものね。あれは中年殺しですよ。

山田 (笑)ありがとうございます。作品はいかがでしたか?

堤 山田作品はね、まず嘘をついていないんだよね。「私はこの作品で勝負する!」という思いがすごく強い。あとは世代。今、32のあなたにしか語れないものを表現していてそれが完成されている。「荒川〜」を見たときに、最初すごい混沌としたものをたたきつけられて、「あ、

世代的に無理かも」と思ったのだけれど、中盤以降見事に着地させていった。世代言語を機関銃のように撃つ人もいる、未完成で青い言語を多用する人もいる、逆に自分たちよりもはるか上の世代の大人ぶった言語を使う人もいる。そういった人が多い中で、すべてのバランスがとれていた。これは怪物がでてきちゃったな、と思ったんだよ。こんなすごい人は仲良くなるしかない!って戦慄。劇団健康(のちのナイロン100°C)や大人計画の初期を見たときの衝撃と同じだった。そういった自分の世界をしっかりと発信できる人って、小説家とかではたまにいますけど、演劇は集団芸だからね。演出家がすごくよくてもアウトプットするのは俳優さんだったりするし。舞台に立っていた俳優さんもすべて良かったからね。本当にもうファンです。

山田 ああ、うれしいなあ…

堤 そういった審美眼もプロの演出家には必要だと思う。自分の言葉をすべて表現してくれる俳優さんっていうのは、戦友のような関係性を構築しないとうまくいかないでしょ、初めての俳優さんとはどういう風にアプローチをしているの?すごい知りたい。ワークショップとかあったら見に行きたい。

山田 あ、ぜひぜひ、稽古場とか遊びにきてください。以前、高校生を演出した時はキャッチボールをしたりしましたね。稽古場の端と端に立たせてボールと一緒にセリフを投げ合うんです。そうすると相手との言葉の距離感もわかるようになる。普段の生活の癖だったりすると思うんですけど、他人との距離感をうまく掴めない人って少なくはなくて。だから彼らにもわかりやすくキャッチボールという身体的なアプローチを図りました。「荒川〜」のときは役者さんとのディスカッションも多かったですが、役のままエチュードをやらせたりしましたね。役の設定でけんかさせてみたりとか。そうすると脚本を読んだときに感じた質感が「分かっているはず」ではなくて体感できるので、感情的にもイメージで終わらないようになる。その上で、「ここはどう思いましたか?」と話してみても理解を共有したり「であれば声を1トーンあげてみましょうか」と演出を加えていきました。

堤 ああ、そうなんだ、「ここはこうしろ!!!」もっと吐き出せー!!」とかではないんだね(笑)



堤幸彦(つつみ・ゆきひこ)

1988年オムニバス作品『バカヤロー!私、怒ってます』で劇場映画デビュー。ドラマ『金田一少年の事件簿』、『ケイゾク』、『池袋ウエストゲートパーク』、『トリック』シリーズ、映画『20世紀少年』3部作等のヒット作を通じ、スタイリッシュな演出と独自の笑いで“堤色”というべき世界を確立、不動の人気を得る一方、『明日の記憶』や『MYHOUSE』などの社会派作品も手がける。また、映像演出の他にも『悼む人』(2012年)や、『真田十勇士』(2014年、2016年)など、舞台演出も精力的に行っている。2015年には映画『天空の蜂』(松竹系)で「第40回記念報知映画賞 監督賞」を受賞。今年2017年はドラマ『視覚探偵 日暮旅人』を制作。アイドルユニット『上野パンダ島ピキニーズ』をプロデュース。